

写真

银杏会

第40号



令和2年11月発行

蘆花恒春園

一枚の写真－少年時代－

立春も過ぎ暦のうえでは春とはいえ早朝はまだ寒い。我が家の塀際にある椿の小枝に半切りにした蜜柑を差して小鳥の餌付けをしておく、つがいと思われる二羽の目白が飛んできて忙しそうについばんでいる。「今年も春がやってきた また逢ったよね」と嬉しくなる。四季折々、その季節の訪れを感じるが、とりわけ春は際だっているように思う。

三月に入ると花の季節。南から桜前線が北上してくると、華やかなお花見の風景があちこちに見られるようになり「今年もお花見ができてよかった」と思う。そして、年齢を重ねるごとに思いは増して来し方を振り返るようになる。春は出会いと別れの季節。桜咲く風景に卒業式の思い出が重なる。卒業式への想いは人それぞれ境遇や年齢によって異なるが、希望や喜びのほかに一抹の感傷がともなうものだ。

思えば、終戦時の混乱した世の中で迎えた小学校の卒業がとても印象に残る。当時、戦争による米軍の本土空襲を避けて大阪から母の故郷である九州福岡県の田舎へ疎開していた。日々の暮らしは貧しかったが、山や川に囲まれた自然の中で過ごした少年の心は豊かに満ち足りていた。年長の友達に交じって遊んだ兵隊ごっこ、精霊流しのお供え物を戴いた川遊び、野苺、桑の実、棕の実摘み、そして夏の

夜の真っ暗な墓地での肝試し等々日中遊びに熱中していた。また、学校では、都会から転校してきた疎開組なのでいじめっ子との喧嘩もよくしたが、近所に住む兄貴分が何時も味方になってくれた。5年生の時にこれまで別々のクラスだった男子と女子が同じクラスに混在することになり大騒ぎとなったが、一緒に机を列べての授業は面はゆいが案外楽しかった。

昭和 23 年に小学校を卒業した。その時の卒業記念写真がある。かなり色褪せたモノクローム写真で、そこには終戦を境に戦前、戦後を精一杯生きた少年、少女の顔がある。学校代表選手として一緒に走った友、命の恩人で生涯の親友となった友そして心密かに淡い憧れを抱いた友がいる。

昭和 20 年、米軍機による大阪市街全域の空襲で父一人残っていた住家も全焼した。その際、幼少時のアルバム等も全て消失してしまった。

そして、幼少年時代の写真が手元にあるのはこの 1 枚だけとなった。



写真家林忠彦の銀座

戦後の記憶

林忠彦は 1918（大正 7）年、山口県徳山市の写真館の長男として生まれる。

『写真ほどリアルに後世に残るものはない』という言葉と共に、「日本の作家」1971（昭和 46）年、「カストリ時代」1980（昭和 55）年、「日本の家元」1983（昭和 58）年、「茶室」1986（昭和 61）年、「東海道」1990（平成 2）年、など多くの写真集を残した。1983（昭和 58）年に紫綬褒章を、1988（昭和 63）年に勲四等旭日小受章を受章。1990（平成 2）年肝臓がんのため逝去、享年 72 歳であった。

1992（平成 4）年、周南市・周南市文化振興財団にて林忠彦賞が設立された。没後も写真展や写真集刊行がおこなわれている。



「写真家、林忠彦の銀座」～戦後の記憶～をノエビア銀座ギャラリーで観賞したのは令和 2 年 2 月 26 日であった。

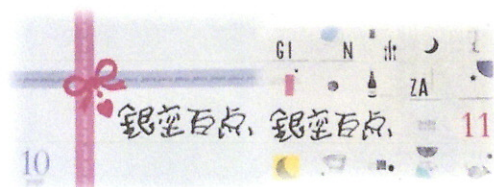
最初に目に入ったのは石原慎太郎裕次郎兄弟、日劇をバックに輝いてみえた。昭和 31 年の撮影で、思わず高校生に戻ったように気分がはなやいだ。次は洋装の林芙美子、和光近くの都電停留所に立つ様子が珍しい。都電の賑わいや銀ブラする人々等の作品の中に誰もが知る傑作太宰治の姿もあった。

あまり広くない会場で作品数も限られているので、もう一度見返したいと思ったが、

後続の人に押されるように外に出てしまった。しかしなぜか心が残っていた。

どうしても見たくなり翌日再び訪れてみると無情にも「臨時休館」であった。

そしてこの日を境に日頃の活動の休止連絡が次々入り、長い自粛生活に入った。



「男を撮れば林忠彦」と称えられた文士代表作が生まれたのは、終戦直後、銀座のバーでの、「無頼派」の作家との出会いがきっかけとのこと。カストリ※雑誌ブームの時流から高度経済成長へ、そしてバブル景気へと移り変わる激動の昭和時代、世相をとらえたスナップから文化人のポートレート、日本文化の真髄を追い求めた風景写真まで、復興していく日本のエネルギーを原動力に、凄まじい勢いで撮り尽くした。

平成 5 年に開館した山口県周南市美術博物館 林忠彦記念室には業績を後世に残すため 1500 点以上のオリジナルプリントが収蔵されているという。次回岡山へ墓参に行くおり足を延ばしたいと考えている。 Y.K



再開後のギャラリー

写真

コロナウイルスで世間を騒がせ、長きに亘外室自粛で我が家の本棚押入れを整理、宝物も古くなるとごみの山。仕事諸々の書物、観光ガイドブック古い写真集など1週間位掛けて廃棄処分しました。捨て難いのも沢山ありました。



昭和16年3月伊勢参り祖父の写真。

小生の懐かしく思い出のある写真もありました。学校帰りは何時もトラックで、貯木事業所まで特定の子供のみ。



トラック積荷降し、ミニトロッコ風景。



故郷離れた友人達元気で居るかな、
人生も半ば楽あれば苦もある、一コマ。



お祝の餅つき、カラオケ、帯祀り、王選手と握手グローブの様な大きい手でした。我が家の家族。



今迄写し撮ってきたフィルム式カメラ
と新デジタル式カメラを使ってきた、デ
ジカメは簡単軽量で持ち運び撮るにも
楽。バカチョンカメラ



沖縄のシンボル首里城焼ける前の優美
な城、残念ですが昨年焼けてしまいました。



最後の奉仕静岡営業所へ転勤 4 年間



ローカル水郡線磐城塙駅上り列車



今では乗客数も少なくなって気動車も
二両から一両になっていた故郷。



早い復興を望みます。

各種写真集

『60の手習い』と言われますが私も年取ってから知人に古いレジカメを頂き何気なくシャッターを切ったのが初体験でした。それ迄はうちにはおじいちゃんが暗室を作って写真の製作に凝っていたのでモデルにはなりましたが、あまり興味はありませんでした。それから私もおじちゃんまでは行きませんが…遺伝子でしょうか野山を走り回りカメラマンながら撮りまわりました。

外国では有名人だとは知らず、出しゃばって撮っていたら本物の現地のカメラマンからパ
ラッチと冷やかされたものです。それでも調子に乗りパチパチと撮りました。

彼女が私にポーズをとって私に協力して写真に納まってくれました。遠い思い出です。



12月になると何となくせわしく、いつも何かに追われているような気持ちになってくる。「出来るものから早めに済ませておこう」という習慣が身についてきて、年賀状については12月早々から作り始めるようになった。

年賀状の文面は故郷である富士五湖から見た富士山をバックに使い、片隅に正月を現すような、例えば松飾り等の写真を貼り付け、年始の挨拶は写真があくまでも主になるような位置に書き込むことにしている。

河口湖の岸边にあった兄貴の家に一年に数回顔を出すのが年中行事のようになっていたので、これまでは富士山の写真を毎年そこで写して、貯めておくことができた。

しかしー昨年、兄貴が子供の独立を機に長年続けてきた商売を辞め、御坂山塊の反対側にある温泉街に住いを変えてしまったので、これまでのように気軽に出かけていき富士山の写真を撮っておくことが難しくなってきた。

使用する写真を都内から望遠レンズで撮った富士山、友人が撮ったものを借用、インターネットの無料写真等を使うようことも考えなければならなくなってきた。

令和2年の年賀状はそんな事情の中で材料を集めました。

今回集めた写真の一部



(左上から)

幡谷駅から望む富士山、干支ネズミの2020年・オリンピックエンブレム、
河口湖から見上げる富士山(2枚)、松飾り

令和二年の年賀状



「令和2年・年賀状」の文章面です。集めた写真の中から Office の Word を使って写真を貼り付けました。おとなし過ぎるような感じだとは思いましたがこれで完成です。

宛先面は送り先がご夫婦など連名宛でも使える「筆まめ」を5年程前から使い、時にはフォントを変えて使い続けています。

Mail、Skype 等での利用

Mail、Skype 等こんな写真、
文章の使い方もしています。

- ◎ Mail に写真や文章を添付して送る。
- ◎ Skype で話をする時、写真や書類を送りそれを見ながら話し合う。
また、Skype で友達と会議 会合等をしているとき、急遽必要となった場合には手元の写真や書類を素早く参加者に送り話を続ける。
- ◎ ネットワーク上の OneDrive に写真や文章を保存して友達に使ってもらう。友達からも写真や文章を OneDrive 上に送ってもらい共有の作品を作る。
これらは、すべて Windows10 の機能です。思うようにいかないこともありますが、仕事上でも趣味の上でも大変便利です。

最近新しい技術が早いスピードでPCに取り入れられています・・・我々の年代、新しいことを覚えるのに時間がかかります・・・が、頑張っています。(完)

2020.2.末 T.T

追記 (画材の年賀状は時宜を逸していますが、数年後に読み返した時コロナウイルス禍の世相を思い出すきっかけとなるのでそのままにしておきます。

◎上の文章はコロナウイルスの発生が初期の段階で比較的平穏だった令和2年2月に書いたものです。
◎その後もコロナウイルスは拡大し続けた。三蜜を避けるためとられた都のコロナ対策、一旦は功を奏したかに見えたが、第二波の発生を思わせる勢いで拡大し続けている。パソコンクラブの文集40号の作成作業は集会禁止のため10月になっても開始できないでいる・・・コロナウイルス禍の日常生活、経済情勢の変化、医療供給等を身近で体験してきた私は、ウイルスが収束した後にこの文章を読み返し、平穏だった頃とコロナ収束後の社会の変化、進展をどんな気持ちで見比べていることだろう？

2020.10.6

写真機に関する思い出

今号の題は、早々に「写真」と決まったので、何を書こうかと考えていたところ、次の歌を思い出した。

僕はアマチュアカメラマン
素敵なカメラをぶら下げて
可愛い娘を日向に立たせ
前から横から斜めから
あっち向いてこっち向いて
ハイ パチリはいいけれど
写真が出来たら みんなピンボケだ
アラ ピンボケだ おや ピンボケだ
ああ みんなピンボケだ

三木鶏郎・作詞作曲 灰田勝彦・唄

そこで、調べてみたところ、この歌は、昭和26年9月商業ラジオ放送が許可になって、初めて放送された（昭和26年9月6日）コマーシャルソングで、提供会社はコニカの小西六、商品名は一回も出ず、写真の失敗話五つだけで構成された珍しいものである事がわかった。取り上げられた失敗は、ピンボケ、構図不良（首がない）、二重撮り、露出過度、ブレの五つである。これらの失敗は、当時、私ばかりではなく、多くの人がやったものであったと思うが、その原因は、カメラマンの腕というよりは、写真機に責があるといってもよいものであると私は思っている。

これから書くことは、ベビーパールを中心にした思い出を主にしたものである。

ピンボケ

当時の写真機には距離計がついていなかったから、きちんと撮るには、巻尺などで正確に距離を測らなければならなかった。特に唄のカメラマンは、可愛いあの子を撮ったので、近くから撮った筈であるから猶更である。目測で距離を測り、しかも近距離から写真

を撮っていたのであれば、ピンボケは避けられなかったろう。特に、当時のフィルムの感光度はASA (IOS) で50から100であったから、絞りを利かせて、焦点深度で補うということはできなかったから、なおさらであったろうと思う。特に、当時の写真屋さんがカメラの上からかぶせた遮光黒布の中に首を突っ込んで、フィルムの位置に置いた挿りガラスに映る像でピントを合わせたのと比べれば、無理のないところである。

手振れ(ぼけ)

結果的には前項に書いたピンボケ同じような結果であるが、原因が違うので、項を改めた。昔の写真機は持ち難かったので、手振れが多い。特に、フィルムの感光度は、低かったし、レンズも暗かったので、早いシャッタースピードは使えなかったこともあって、手振れが多かった。本来なら（今でも）、がっちりした三脚を使って撮るべきなのだが、どうしても手持ちで撮ってしまう。今では、これらの点は改善されているので、三脚を使って撮る方が珍しいくらいになってしまった。

構図不良（首が無い）

安物蛇腹式カメラ（例えば、ベビーパール）には、きちんとしたファインダーは機体については居ず、上から見てレンズの左側にプリズムのようなものが付いていただけで、それから見た範囲は、必ずしもフィルムに写る範囲と一致しているとはいえなかったようだし、ぐらついているものもあったから、仕方がないのだったろう。

二重撮り

当時のフィルムは、セルロイド製のフィルムと遮光紙（裏紙と言っていたのではなかったか）を重ねてスプール

に巻いたもので、遮光紙の外側にあたるほうに番号が振ってあるものだった。当時の小型カメラの殆どは蓋にあいている赤窓を通して見えるフィルムの裏紙の数字を見ながら手動で巻き上げるものだったから、何番まで巻き上げたのかよく覚えていないと二重撮りとなるのだった。特にフィルムも高かったから、無駄にすまいとすると、二重撮りをしがちだった。今は自動巻き上げになっているし、フィルムも使わなくなってきたから、二重撮りはなくなっていると思う。

露出過度(特に、フラッシュを焚いたとき)

これは、室内で集合写真を撮るとき、禿げ頭の人をリフレクターの代わりとして、フラッシュをたいて写真を撮ったところ、露出過度となり、画面が白くなったという失敗である。

昔は、ストロボなどというものがなかったから、マグネシウムの粉を主とした閃光粉を焚いて光を得ていた。閃光粉を焚くのは危険なので、写真用に使う道具があってこれを用いて閃光粉を焚いたのである。一回に焚く閃光粉の量も目分量で使用した。キャンプファイアーなどの時は、皆に注意をしておいてからシャッターを開け、同時に焚火の中へ紙に包んだ閃光粉を投げ込むと雰囲気のある写真が撮れたものだった。

その後、閃光球というものが出来て、それを電気で発光させれば危険も少なくフラッシュ写真が撮れるようになったが、これは一回きりの使い捨てだったし経費も掛かるのでなかなか使えなかった。そのうちに、何回でも使えるストロボというものが出てきたので、便利に、一回当たりの経費も少なくフラッシュ写真が撮れる様になった。

今では閃光粉などというものがあつたことすら知らない人のほうが多い。

露出計

露出については、露出計の簡単なものがなかったから、感度も低く、許容度も少ないフィルムで写真を撮るのは難しかった。ただ、光度計(露出計ではない。被写体の所へ来ている光の量を測るもの)というものがあって、人物写真を撮るときなどには、これを顔など被写体の主な場所へ持ってゆき、そこへ届く光の量を測定して露出を決めていた。景色や少し離れたものを撮るときのためには、露出計算尺というもの(季節、時間、天気などを入れると、しかるべき露出がわかるもの)があって、私はよく使っていた。

この他、写真機の装置としてはシャッターが大切で、写り方にも関係するのだが、難しくなるので省く。

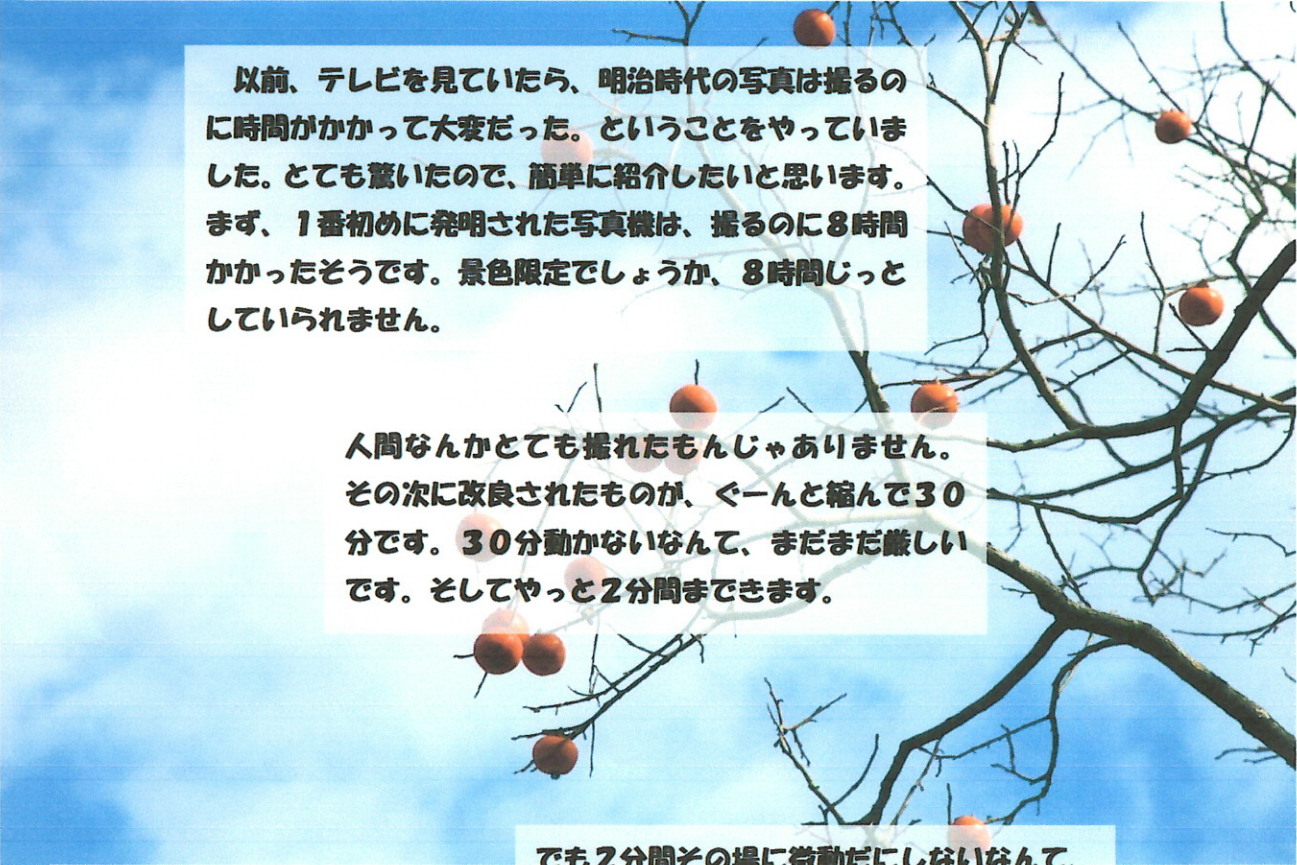
ここに書いたことは、フィルムカメラに関することであるが、デジタルカメラのほうが幅を利かせるようになり、“フィルムカメラではない”と言っていた友達もデジタルを使うようになった。ストロボになってからでも大分経ち、10年以上ストロボを使ったことはない私でさえいまだにフラッシュを焚くなどと言ってしまうのだから恐ろしい。

携帯電話に写真機能が付くようになって、カメラを持っている人よりスマホを持っている人のほうが多くなった現在、写真機は、今後、どのように変化をしてゆくのだろうか。

フィルムカメラばかりではなく、閃光粉を焚く道具、閃光球を焚くもの、露出計算尺、露出計なども持っていたが、何処かへ仕舞い忘れて、ご覧に入れられないのが残念である。

2020. 11. 10. K. K.

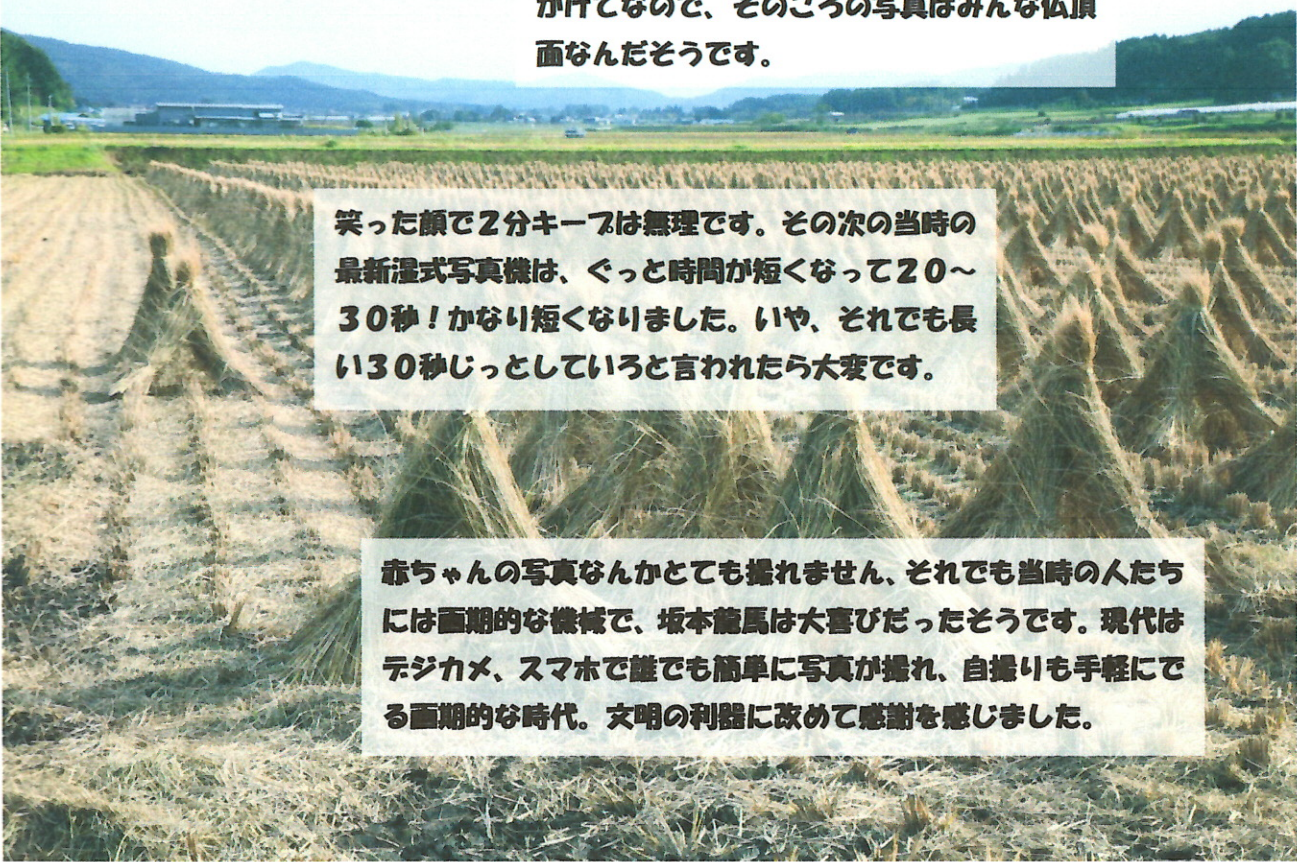
昔の写真は撮るのに時間がかかった！



以前、テレビを見ていたら、明治時代の写真は撮るのに時間がかかって大変だった。ということをやっていました。とても驚いたので、簡単に紹介したいと思います。まず、1番初めに発明された写真機は、撮るのに8時間かかったそうです。景色限定でしょうか、8時間じっとしてられません。

人間なんかとても撮れたもんじゃありません。その次に改良されたものが、ぐーんと縮んで30分です。30分動かないなんて、まだまだ厳しいです。そしてやっと2分間までできます。

でも2分間その場に微動だにしないなんて、そんな拷問あるでしょうか。日本でこの写真機が使われていたのは幕末から明治初期にかけてなので、そのころの写真はみんな仏頂面なんだそうです。



笑った顔で2分キープは無理です。その次の当時の最新湿式写真機は、ぐっと時間が短くなって20～30秒！かなり短くなりました。いや、それでも長い30秒じっとしていろと言われたら大変です。

赤ちゃんの写真なんかとても撮れません、それでも当時の人たちには画期的な機械で、坂本龍馬は大喜びだったそうです。現代はデジカメ、スマホで誰でも簡単に写真が撮れ、自撮りも手軽にできる画期的な時代。文明の利器に改めて感謝を感じました。